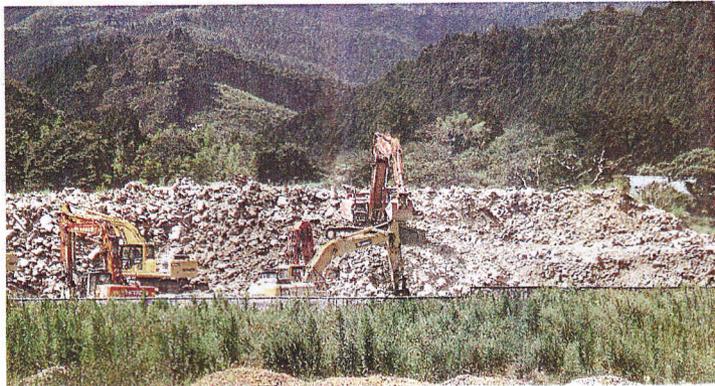


宮城、岩手でボランティア 岡山の学生に同行

がれきの山に至る所で出くわした。コンクリートの防潮堤は倒れたまま波に打たれている。11日、東日本大震災から2年半を迎える被災地の光景は、復興はまだ道半ばにあると訴えていた。8月25日、岡山経済同友会は被災地の宮城、岩手両県へ岡山県内の大学生ら54人を派遣。記者として、ボランティアの一人として同行した3日間を報告する。(安部晃将)



被災地の至る所に点在するがれきの山。作業中の重機が小さく見えるほど。うずたかく積まれている。8月27日、岩手県大槌町

深い爪痕 復興半ば

高さ20層の津波に襲われた宮城県石巻市雄勝町。最初に訪れたのは旧桑浜小学校だ。復興のシンボルとなる交流拠点にと、再生計画が持ち上がっている。高台にあり、津波被害は免れたが、裏山の崩落で木造平屋の大正建築は今も大量の土砂に囲まれる。

その土砂の撤去を中心とした作業は1時間に10分の休憩を挟み、計5時間。拳大の石が交じり、シャベルで一度にすくえる量は限られる。「でも誰かが、少しでもやらないと前に進まない」と、岡山理科大1年岡雄喜さん(18)が言った。



旧桑浜小学校で土砂を片付ける学生たち＝8月25日、宮城県石巻市雄勝町

土砂撤去 草取り 「やらねば進まぬ」

「ニュースで被災地のことは知ったつもりにはなかった。倉敷芸術科学大3年東快昌さん(21)はそうつぶやき、厳しい現実を受けていると語っていた。作業者に加わった漁師の永沼清徳さん(54)はそんな願が込み、大通り沿いの店舗はほぼ復旧。車が行き

学校近くの桑浜港では草取りをした。コンクリートの基礎が整然と並び、かつて住宅が軒を連ねていたことをうかがわせる。あるじが不在となった一帯の土地は腰の高い草が生い茂る。漁の合間に草取りを続け

ズーム 岡山経済同友会 会の復興支援活動 将来の復興を担う若者に被災地の現状を知ってもらうと、2011年から年1回企画。今年は岡山県内11大学・短大の学生ら男女計54人が参加。国際医療ボランティアAMDA(岡山市)の仲介で宮城県石巻市雄勝町、岩手県大槌町を訪ね、土砂の撤去、草取りなどの清掃活動に取り組み、被災者と交流した。

交い、スーパー、洋服店などで買い物をする人もいて、町は少しずつだが活気を取り戻しつつあるように見える。だが、一度脇道へ入ると様子は一変した。津波で更地と化した土地がどこまでも広がっている。店と言えはバラック小屋のような仮

設のコンビニがあるだけで、人の気配を全く感じない。地元で建設業を営む渡辺光吉さん(78)は「若者が流出し、年寄りしか残っていない。いつ町が消滅してもおかしくない」と嘆

息を吐き、被災地を歩くと、危険感すら覚える」と嘆息した。雄勝町から北へ約10

た場合、岡山県は南部を中心に3m超の津波が押し寄せ、犠牲者は最大約3000人と推計されている。

▽…今回の活動の一環で、宮城県の大川小学校を慰問した際、慰霊碑の前でわが子の名を叫び、泣き崩れる女性を見て胸が締め付けられた。そんな悲劇が2度と起こらないようにするためには何をすればいいのか、何ができるのか。あらためて考えさせられた3日間だった。(安部晃将)

取材メモ

悲劇起こさぬためには

▽…「小学校の教師が夢。今回の活動で得た教訓を子どもたちに伝えたい」「消防士になって地元住民の防災意識向上に努める」。ボランティアを終えた学生たちは、帰途につくバスの中で口々に感想を述べた。

▼…大震災の惨禍に触れた学生たちは「もし岡山で同様の災害が起きたら…」との不安も口にする。国などが想定する南海トラフ地震が発生し、

0^〇キ。沿岸部を中心に3胸がざわつく。

700戸以上が全半壊 多くが被災地の訪問はし、死者・行方不明者が初めてという学生たち。

1200人超という岩手 復興途上にある今と、人々心に触れ、東北への思いと自らの将来を重ね合わせた。

バスで3時間かけて到着した陸中海岸青少年の家では被災者4人の証言を聞いた。「真っ黒な濁アできる医療人になり、流が容赦なく押し寄せここを再び訪れたい」。

た「燃えた船が波とと川崎医療福祉大2年出射もに山にぶつかり、辺り 菜実さん(19)は看護師へ一面に炎が広がった」。

惨状がまぶたに浮かび、の道を歩む決意を、さらに強く抱いた。